

PROFESSIONAL FILE

#112 フォトグラファー 島田 純子さん

—写真とはどのように学んだのですか？
専門学校です。編集業の主人が、雑物の写真を集めてくれる人を探していたんです。そこで、じゃあ私が勉強しよう！と。学校に通っていたのは、4人の子供もを印刷していた所。印刷中はいつも何かの学校に通っていて、盛んでていなくなる前に、できる限りのことをしておきなせよ、と覚悟してもらったんですね。

—どのような写真を撮られていますか？
印刷中の写真・マニティフォトや、赤ちゃんの写真、家族写真などです。他にも20代過ぎに自分のブードを、というイメージなどもあります。最初は、パソコンで丁寧に加工をし、一般のフォトブックにして納品。依頼主の方は、女性ばかりです。私自身もそうでしたが、女性って「きれいに撮らねえ」という要望があるもの。さらに、子どもの写真やマニティフォトについては、子どもへの愛着が溢れる写真にしたいと思う。お客様のそんな思いに応えたいから、おしゃべりな笑が伝わるようなアート性の高い一冊メ

となるよう、全費りをかけます。お客様とは、どんなフォトブックにするか相談に申し合うのですが、お客様も求めるレベルが高い方が多い。無敵な写真家は、たいてい200枚くらいでしょうか。「買って！」なんて買わしてしまおうと意に固くなってしまふから、泣きながら、その人の素敵な表情を自然に引き出すようにしています。コミュニケーション能力が必要なので、ポートレートに関しては言えば、フォトグラファーの仕事って編集業に近いかもしれません。お客様と仲良くなり、一冊一冊、心を込めて作りこんでいくから、感情移入は深いんです。依頼を受けてから一冊に仕上がるまで、半年と長い時間をかけますしね。写真はメモリアルアート。その家を写し出すように、作り取り、組み立てていく過程は、アートそのものだと思います。受け取った時にお客様が感動して泣いてしまうような、いつか思い出した子どもがまた胸に刺さる愛着を一冊感じられるような、そんな一冊を作りたいです。

フ
ォ
ト
グ
ラ
フ
ァ
ー

花嫁、ピアニストなどの仕事を続けて、37歳でフォトグラファー兼地蔵学校に通い始める。卒業後、37歳でフォトスタジオを設立。「美」と「家医」をテーマに、写真を撮り続けていく。

Q ストレス解消方法は？

A 素敵なレストランでランチ。
出来るだけ大切な仕事と関係なくって、ある程度一休二日を休ませます。

Q 仕事でおかせないアイテムは？

A カメラ、そして、カーラーとつまみづけ。
机を散らかす仕事なので、髪をゆいせり、爪ををりこむしたり、爪を傷めると大変なんです。

Q 好きな女性像は？

A 妻・母・女の正三角形が
実現できている女性。

Q 今の年収は1000万円超？

A 75点。
得意にがんばっているが、ボケているので…

フォトグラファーとは？

クライアントの依頼に応じて、広告、カタログ、雑誌などに使う写真を撮る仕事。カメラマンとも呼ばれ、明確な区分はない。真実は、フォトグラファーは写真、カメラマンはビデオカメラの撮影者を出す。デジタルカメラが主流になってきたこともあり、photoshopなどで無類に業者対応まで行うこともある。資格は必要ないが、専門学校などで学んだ後にフォトグラファーになるケースが多い。

